

# 文化財として大切に守られています



菅沼集落 (合掌造りの数 9棟)



# 世界遺産 五箇山の合掌造り集落



相倉集落 (合掌造りの数 20棟)

### 文化財としての価値

合掌造りは五箇山と白川郷にしかない家の形で、屋根裏を「アマ」や「ソラアマ」と呼んで作業場や物置にして積極的に使います。これは日本の他の地方では見られない家の使い方です。

合掌造りの数が一番多かったのは明治の終わり頃（1900年頃）ですが、その数は約1850棟で、日本中の家の数（約550万棟）と比べると、とても少ない数でした。世界中には木でできた家のほかにも、石やレンガでできた家がたくさんあるので、合掌造りは珍しい家のということがわかります。

世界中で五箇山の相倉と菅沼、白川郷の荻町の3ヶ所だけが、今も合掌造りがたくさん残っている集落なので、三つの集落は世界遺産として価値の高い文化財なのです。



### 合掌造り集落を守っていくために大切なこと

合掌造りには今も人が住んでいるので、勝手に家の中や畑に入らないようにしましょう。

合掌造りはとても火事に弱い建物なので、火の取り扱いに注意しましょう。

美しい村の風景をこわさないために、ゴミを捨てないようにしましょう。



このリーフレットは、富山県の平成21年度いきいき文化財博士活用推進事業の一環として、文化財博士の協力のもと作成されました。

発行者 南砺市教育委員会

### 相倉と菅沼

相倉や菅沼のある五箇山は、日本の中でも特に雪がよく積もる地方です。相倉は庄川から少しはなれた標高400mの高台にあり、菅沼は周りを庄川に囲まれた標高330mの平らな土地にあります。

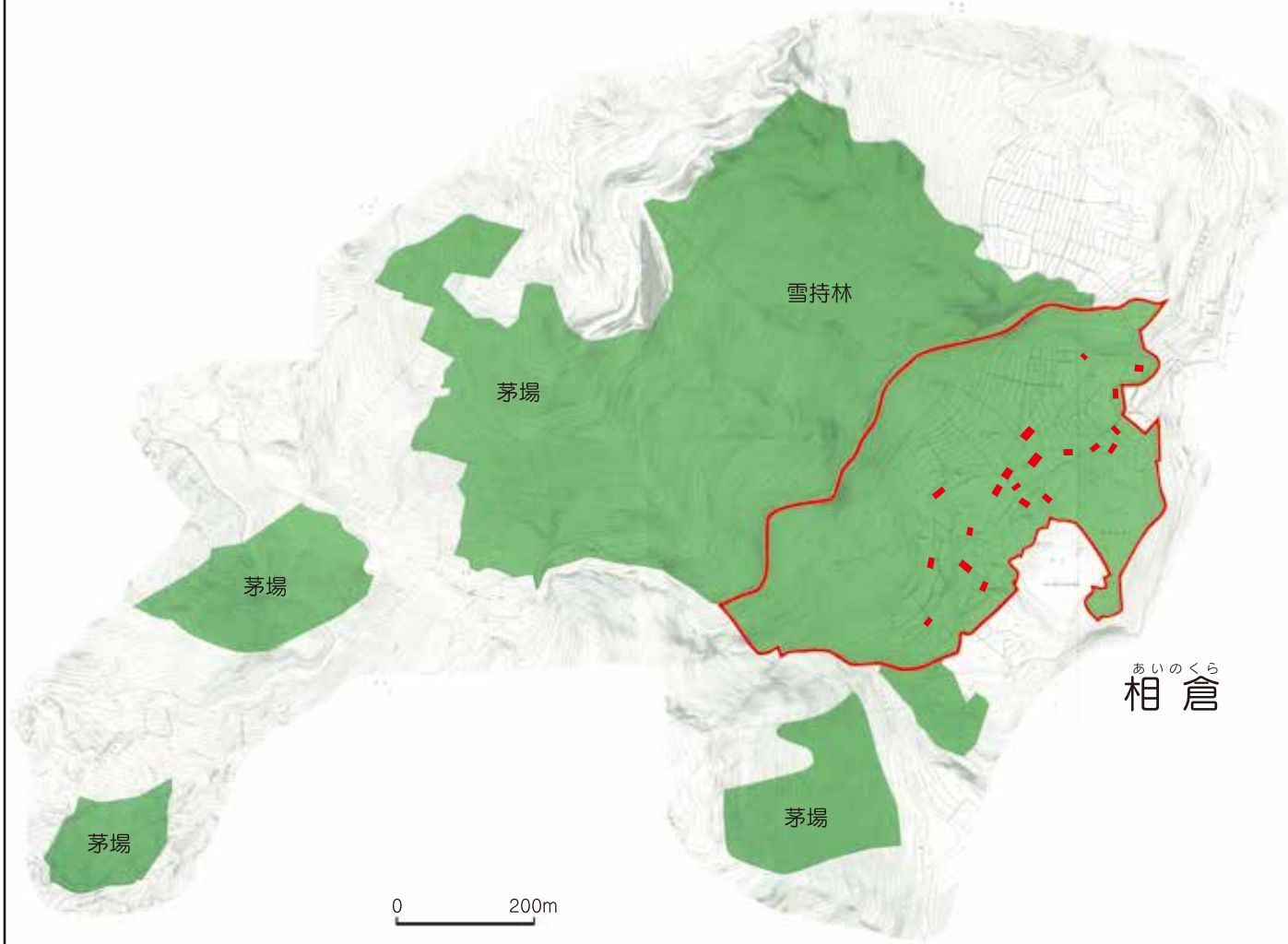
集落には斜面に石垣を積んで作った棚田とよばれる田んぼや畑があり、近くの山には雪崩から集落を守る雪持林や、屋根の葺き替えに使う茅を栽培する茅場があります。

相倉と菅沼は、たくさんの合掌造りが昔からの集落の形のまま保存されている大切な文化財として、昭和45年（1970）に国史跡に指定されました。そして平成6年（1994）に重要伝統的建造物群保存地区に選定され、平成7年（1995）には、白川村の荻町集落と一緒にユネスコの世界遺産に登録されました。





## 文化財の範囲



## 菅沼



|   |         |
|---|---------|
| <span style="color: red;">■</span>  | 合掌造り    |
| <span style="color: green;">●</span>  | 史跡の範囲   |
| <span style="color: red; border: 1px solid red; border-radius: 50%; padding: 2px;">○</span> | 世界遺産の範囲 |

重要伝統的建造物群保存地区の範囲は世界遺産と同じです。

| 文化財の面積 |         |         |
|--------|---------|---------|
| 面積     | 史跡      | 世界遺産    |
| 相倉     | 42.0 ha | 18.0 ha |
| 菅沼     | 14.5 ha | 4.4 ha  |

1ha (ヘクタール) は 100m×100mの広さです。



# 合掌造りのここがすごい！

合掌造りには人々の生活の知恵と工夫がつまっています。

屋根の葺き替えは約15年に一度、村の人が協力して行います。みんなが協力して助け合うことを「結い」や「こーりやく」といいます。茅は村からはなれた場所にある茅場で毎年秋に収穫します。屋根に使われている茅は、古くなるとリサイクルして畑の肥料に使うのでムダになりません。



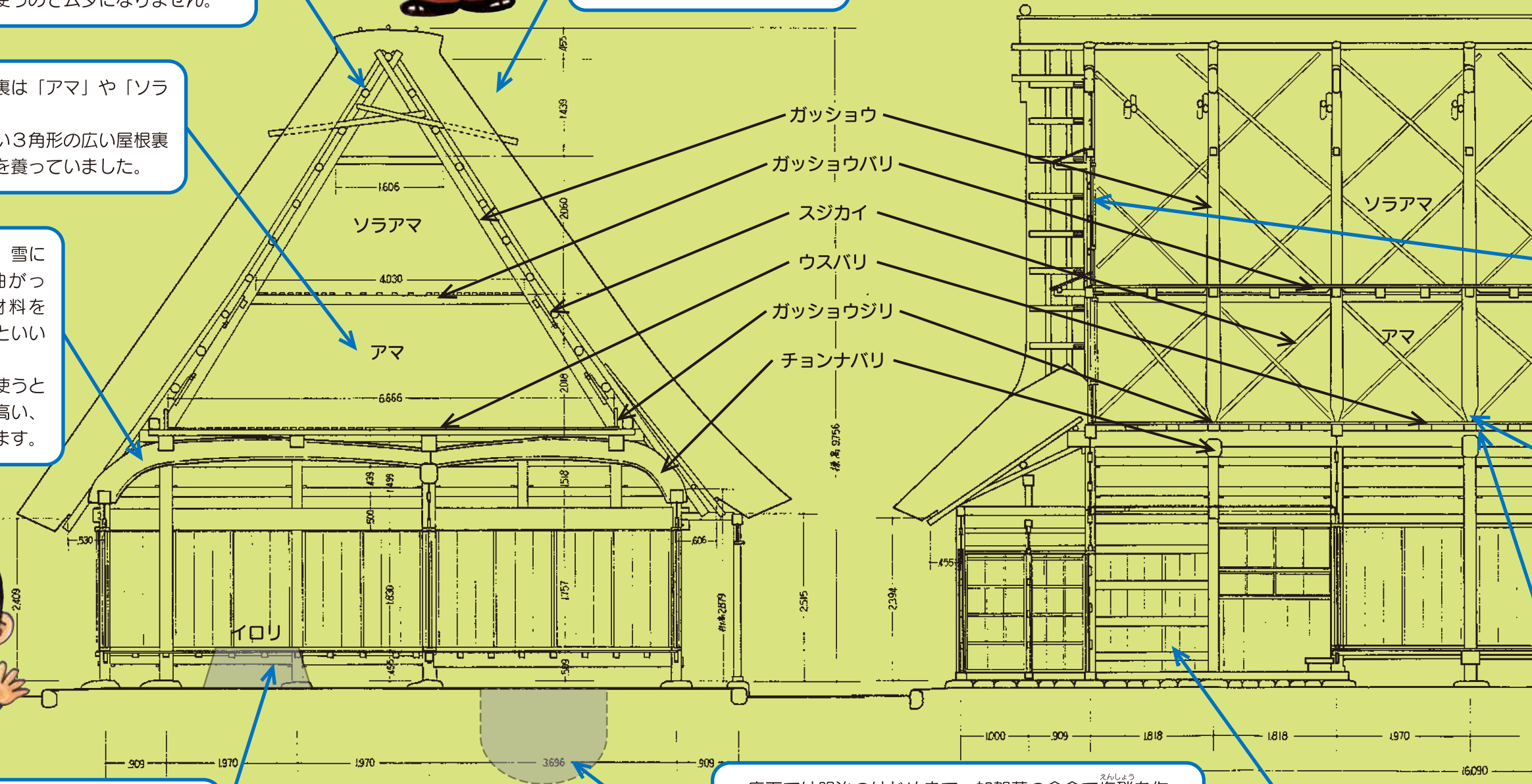
屋根の角度がとても急なので、積もった雪は自然に屋根からすべり落ちます。

合掌造りの屋根裏は「アマ」や「ソラアマ」といいます。ここでは柱のない3角形の広い屋根裏では、たくさん蚕を養っていました。

山の斜面で育ち、雪に押されて根元が曲がった大木を使った材料を「チョンナバリ」といいます。チョンナバリを使うと短い柱でも天井の高い、広い部屋が作れます。



囲炉裏から出る煙は屋根裏や家の中すみずみに届いて防虫剤の働きをして、木を食べる害虫から合掌造りを守ります。

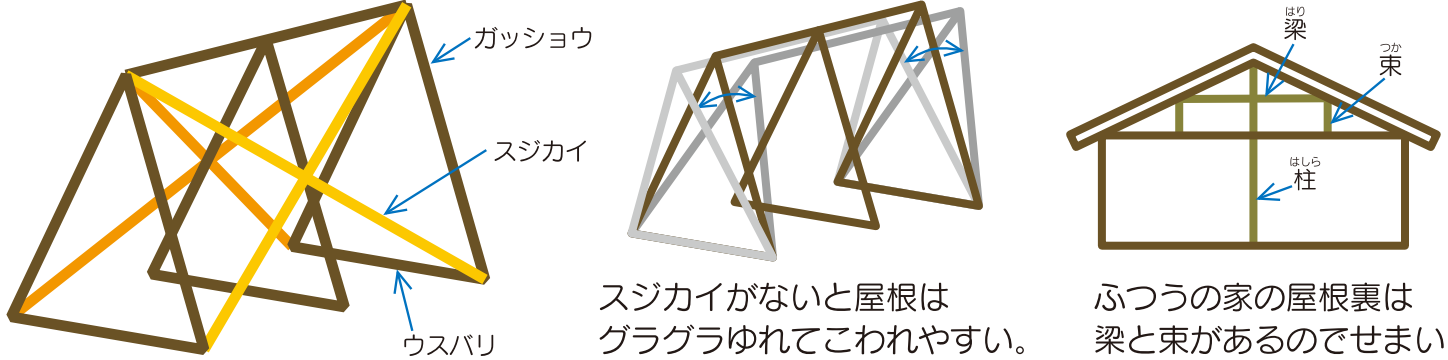


床下では明治のはじめまで、加賀藩の命令で塩硝を作っていました。塩硝は火薬の原料の一つで、本当は「煙硝」や「焰硝」と書きます。でも、加賀藩は江戸幕府にないしよ武器になる火薬を作っていたので、わざと「塩」の字を使って、幕府にわからないようにしていました。

1階には広い部屋や、「二ワ」と呼ばれる土間があり、わら細工や和紙作りなど、冬でも家の中でいろいろな仕事ができます。

## 合掌造りの屋根裏のひみつ

「ウスバリ」と「ガッショウ」でできた大きな3角形を「スジカイ」が支えます。スジカイには傾いた屋根を元に戻すバネのような力があるので、合掌造りの屋根は柱や束がなくても丈夫なのです。



スジカイがないと屋根はグラグラゆれてこわれやすい。

ふつうの家の屋根裏は梁と束があるのでせまい。

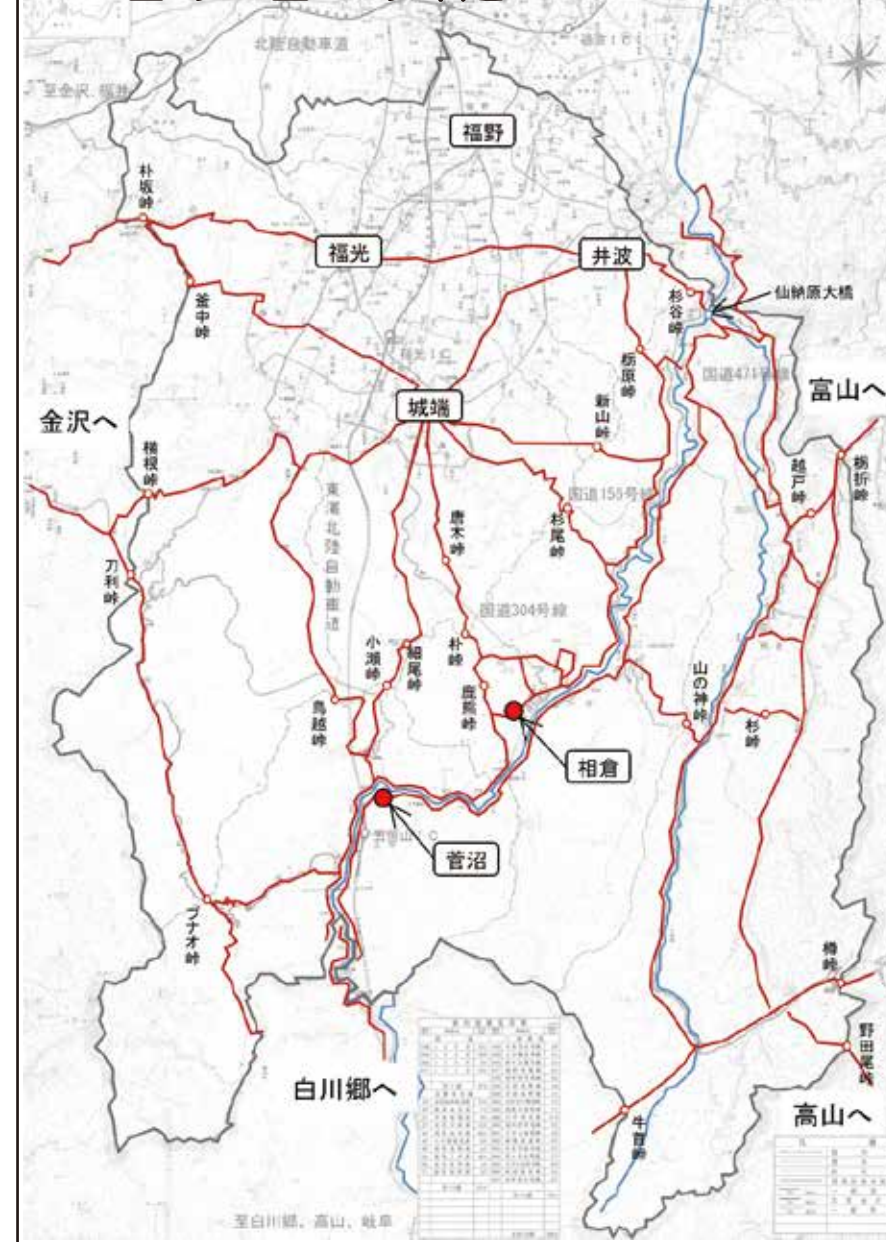


合掌造りの屋根の形は切妻造りといえます。この屋根の形は、屋根のない3角形の壁に窓を作れるので、屋根裏が明るくなります。

ガッショウの先のとがった部分をガッショウジリといいます。ここをウスバリに作ったくぼみに差し込んでガッショウを建てます。

合掌造りは釘を使わずに建てられています。1階は「ウスバリ」の部分まで大工さんが建てますが、「ガッショウ」から上の屋根は村の人が協力してナワやネソでしばってつくります。

## 昔の五箇山の峠道



## 五箇山の人々の暮らし

五箇山は町から遠くはなれ、冬には雪がたくさん積もる、自然のきびしい場所です。人々は熱心に仏教を信じ、みんなで協力して助け合って生活していました。この助け合いの中から「結い」や「こーりやく」が生まれました。

昔は水が不自由で田んぼがとても少なかったので、畑でヒエやアワ、ソバなどを作ったり、山菜や川魚をとって食べていました。村には蚕のえさにする桑の畑もたくさんありました。

五箇山の主な産業は「養蚕」や「和紙作り」、「塩硝作り」でした。作った品物は人や牛の背中に乗せて、峠道を歩いて城端や井波へ運びました。運んだ品物は町の人に買ってもらい、その代金でお米や五箇山では手に入らない品物を買って五箇山へ運びました。塩硝は加賀藩に納めるため、金沢まで運びました。



茅屋根の葺き替え作業  
村の人たちが協力して茅を屋根に運び上げます。



冬の雪おろし  
棟の雪をおろすことを「棟わり」といいます。